

金子みすゞ『南京玉』に見られる3歳児のことばの特色

濱千代 いづみ

The Vocabulary Features of a 3-Year-Old Child Recorded in “Nankindama” by Misuzu KANEKO

Izumi HAMACHIYO

Abstract

The purpose of this research is to analyze the vocabulary features of a 3-year-old child in relation to development through analyzing the vocabulary recorded in "Nankindama". The results are as follows:

The vocabulary quantity of “Nankindama” reinforces the conventional investigation on the vocabulary of a 3-year-old child.

The first feature of the frequent words is that there are many verbs, and it is around 40%. It shows that the same verb is used repeatedly in childhood.

The second feature of the frequent words is that the first person named "Bū-chan", familiar people such as "okā-chan", and toys such as "kewpie-chan" are raised. This reflects how to perceive the infant's own self. The scene of using her mother's name shows the development of ego.

The third feature of the frequent words is that "ame" and "tsuki" are raised as words about weather. This reflects the tendency of a 3-year-old child to talk about what is visible.

Finally, the color words such as "akai" indicate color recognition at early childhood.

Key words

3-year-old child, “Nankindama”, vocabulary quantity, frequent word, development

1 はじめに

金子みすゞ（明治36年－昭和5年／1903－1930）は大正時代末期から昭和時代初期にかけて活躍した童謡詩人である。夫に創作を禁じられてから、長女のことばを書き留めるようになった。それは昭和4年（1929）10月下旬から翌5年2月9日まで続けられた。その時期は長女の2歳11か月から3歳2か月までに相当する。近年その記録が『南京玉』の題名でJULA出版局から発行された。『南京玉』は金子みすゞの創作を対象にした研究においてだけでなく、3歳児のことばの資料としても貴重である。

一般的に3歳児は基本的な運動機能が伸び、食事、排泄、衣類の着脱などの行動もほぼ一人でできるようになる。言語面では話し言葉の基礎ができて、知的興味や関心の高まりに従い、盛んに質

問するようになる。また、自己主張が強くなり、意思の伝達の欲求も盛んである。「〜と」「それから」など、接続表現を覚え、一文が次第に長くなり、いくつかの文をまとめて言うようになる。その一方で、「オオチイ（大きい）」「ドオジョ（どうぞ）」など、発音の面の未熟さが残り、「ネンネ（寝ること）」のような幼児語を使用する。語彙と文法の獲得、発音の発達という点から見て、3歳は成長の著しい時期である。

本稿では『南京玉』に記録された語彙を計量的な観点で分析し、頻出語を中心にして3歳児のこたばの特色を解明する。

2 『南京玉』の語彙量

『南京玉』には全部で347編の発話が記録されている。月ごとの内訳は、昭和4年（1929）10月下旬から月末までが39編、11月が109編、12月が83編、昭和5年1月が65編、2月初めから9日までが51編である。2月には25編を書いた後、一時中断して残り26編を書き留めた。『南京玉』は漢字片仮名交じりで表記されている。歴史的仮名遣いを原則としているが、一部発音に従ったと見なせる部分もある。「ヲ、カ、チイナ（おかしいな）」[126]（角括弧内にJULA出版局『南京玉』のページを示す）のように、長女が間を置いたと思われる部分は、文節の途中であっても読点で句切られている。「チロイ（白い）」[9]のような発音の未熟な部分や「オテテ（手）」[6]のような幼児語、「アイ、ヨウ、ウウ」[96]のように傍らにいた金子みすゞにも意味がわからない言い回しも書き取られている。『南京玉』の冒頭に、「この子の言葉は、意味はなくとも、また、『詩』なんぞはなほのこと、えんもゆかりもなくとも、ただ、『創作』でさへあれば、残らず書いてゆく事だ。」とある。金子みすゞは長女の発話を創作と捉えて、聞き取った形を尊重して記録に残した。長女の理解語彙は記録されたものよりも多種多様であったと推量されるが、再現する手立てがない。『南京玉』に記録されたものを3歳児の使用語彙と見なして進める。

『南京玉』に見られる使用語彙を計量するにあたり、単位を次のように決定した。見出し語は平仮名で示す。以下、引用は本文の漢字片仮名交じり表記に従い、改行箇所にはスラッシュ（/）を入れ、振り仮名を括弧の中に示すことにする。

1. 幼児の傾向として同語の繰り返しがあがるが、一部のものを除いて別語とみなす。
ヌクイヌクイ、ツテ [59] …「ぬくい」2語
サビシイ、サビシイッテ [59] …「さびしい」2語
2. 原則として読点で切るが、次のようなものは切らずに1語とする
ゴシゴシ、ゴシ [63] …「ごしごしごし」
3. 読点のあとの「ネ」、「ネエ」で文末に位置するものは助詞とみなす。
モモイロ、ネ、[64] モロタノ、ネエ。[27]
4. 接辞「オ」、「サン」などは付けない形にまとめる。
オニンギョウ [7]、オ人形チャン [66]、オ人形サン [153] …「にんぎょう」
オツキサマ [7]、月 [150] …「つき」
（火に）オアタリ [58]、アタラン [35] …「あたる」
5. 人称に用いる場合や、慣用化している場合は接辞を付けたままにする。
オカアチャン [8] …「おかあちゃん」
御飯 [76] …「ごはん」
キューピーチャン [7] …「きゅうぴいちゃん」

6. 発音の未熟なものや長音で発音したものは本来の形にする。
オウチイ [9]、大チイ [38] …「おおきい」
オトナーシク [82] …「おとなしい」
7. 語形にばらつきのない場合は、それを見出しとする。
トッテモ [40] …「とつても」
オ線香 (センコ) [46] …「せんこ」
8. 幼児語は一般的な語形とわかる。
手 [72] …「て」
オテテ [6] …「おてて」
9. 複数の語が縮約したものは連語とする。
「ている」の約 テル…「てる」
「ておく」の約 トク…「とく」
10. 次のようなものはまとまりとして扱い、句とする。
かるたの句「粋が身を食う」の転 スイガミヨク [104] …「すいがみをくう」
意味不明の句 アイ、ヨウ、ウウ [96] …「あいよううう」

『南京玉』に見られる使用語彙を計量すると表1のようになる^(注1)。延べ語数の隣に各月の延べ語数を示す。

表1 『南京玉』に見られる使用語彙

品 詞	異語数	延語数	自立語内の比率%	10月	11月	12月	1月	2月
名 詞	492	1604	51.25	154	522	367	300	261
動 詞	171	847	27.06	60	275	225	163	124
形 容 詞	36	222	7.09	20	71	55	39	37
形容動詞	14	52	1.66	8	20	9	9	6
副 詞	66	166	5.30	11	58	25	38	34
連 体 詞	7	40	1.28	3	9	6	13	9
接 続 詞	2	2	0.06	0	1	0	0	1
感 動 詞	27	69	2.20	1	19	15	20	13
句	11	13	0.42	0	1	7	6	0
連 語	9	115	3.67	14	47	24	21	9
自立語計	835	3130	100.00	271	1023	733	609	494
助 動 詞	14	551		34	158	161	117	81
助 詞	33	1341		89	420	303	286	243
合 計	882	5022		394	1601	1197	1012	818

『南京玉』には、異なり語数において自立語 835 語、助動詞 14 語、助詞 33 語が存する。延べ語数において自立語 3130 語、助動詞 551 語、助詞 1341 語が存する。

表1を見ると、各月の合計に差があるため、月によって品詞の使用量に相違があるのか明瞭でない。そこで、自立語・助動詞・助詞という品詞の別と10月から2月までの月の別とを変数にして、差は無いということを仮定してカイ二乗検定を行うことにする。期待値は次のようである。

表2 各品詞・各月の期待値

	10月	11月	12月	1月	2月
自立語	245.56	997.84	746.04	630.74	509.82
助動詞	43.23	175.66	131.33	111.03	89.75
助詞	105.21	427.51	319.63	270.23	218.43

カイ二乗値を計算すると23.54になる。その値は自由度8の場合、有意確率0.01のときの臨界値20.09と有意確率0.001のときの臨界値26.12の間にはいる。月別、品詞別の延べ語数には差が無いといえない。10月・11月は自立語、12月・1月は助動詞、1月・2月は助詞の使用が多い。この結果に関しては、10月から2月までという短期の記録であり、幼児の発達にかなりの個人差が見受けられ、月の進行と語彙や文法の獲得との関連を論じる準備もないので、報告にとどめる。

ところで、3歳児はいったいどれくらいの語彙を使用するのであろうか。ここで、日本国内における6歳までの縦断的研究で示された数値を見ることにする。久保良英(1922)の調査によると、幼児が獲得する語彙量(異なり語数)は2歳で295語、3歳で886語である。大久保愛(1967)のY児に関する初出語調査によると、初出語を累積した語彙量は2歳で360語、3歳で1029語になる。高橋巖(1977)の語彙調査によると、長男の語彙量は2歳で334語、3歳で1474語、次男の語彙量は2歳で73語、3歳で1486語である。高橋次男の場合は2歳を過ぎて増加した。前田富祺・前田紀代子(1983)におけるB児の初出語を累積した語彙量は2歳で717語、3歳で1749語である。四者の調査における語彙量の相違には採集時間量の相違が関係している。久保良英(1922)の調査は、毎年の誕生日の前後3週間について、毎日1時間観察する方法による。大久保愛(1967)の調査は、毎月誕生日と同日前後に30分から1時間、話しことばを録音し、メモをとる方法による。高橋巖(1977)の調査は、毎日記録する方法による。前田富祺・前田紀代子(1983)の調査は、ほぼ毎日、発声、言語、行動などを気の付くことがあるたびに方法による。初出語を累積する方法では、「うまうま(食事)」のように初期に使用してもその後消えていく語彙が含まれるので、語彙量がやや多くなる。3歳児の使用語彙は、採集時間を限定した場合900語から1000語くらいが目安になるが、実際には1500語から1700語くらいになると考えられる。『南京玉』の調査結果は時間を限定した場合を補強するものとなる。

次に品詞別の語彙量(異なり語数)について検討する。日本国内における3歳児の品詞別の語彙量を測定したのとして、久保良英(1922)の調査結果(以下、久保語彙)^(注2)及び大久保愛(1967)の調査結果(以下、大久保語彙)^(注3)が存在する。久保語彙は単位の取り方に多少違いがあるが、調査時期が『南京玉』の筆録された時期(1929～1930)に近い。大久保語彙は初出語の累積という点で計量方法が異なるが、品詞分類が行われている。それらを利用して『南京玉』の品詞別の語彙量と比較する。

比較するにあたり、以下の操作を行った。

1. 久保語彙では品詞として代名詞が別立てになっているが、それを名詞に含める。大久保語彙では品詞として固有名詞、数詞、代名詞が別立てになっているが、それを名詞に含める。『南京玉』の句は名詞に含める。
2. 久保語彙では形容動詞、連体詞が立てられず、主に形容詞に属しているので、『南京玉』及び大久保語彙の形容動詞、連体詞を形容詞に統合する。

3. 大久保語彙の音まね語は副詞に含める。
4. 『南京玉』の連語は除く。久保語彙で「生キテル」(4歳)のように連結して動詞に属したり、「チャウ(食っちゃウ)」(3歳)のように助動詞に属したりしている。大久保語彙では主に助動詞に属している。大久保語彙の連語その他は2例と少なく、品詞分類が困難であるので除く。
5. 助動詞・助詞については認定基準に差があるので除く^(注4)。

表3 『南京玉』・久保語彙・大久保語彙の品詞別の語彙量(異なり語数)

品 詞	南京玉	割合 %	久保語彙	割合 %	大久保語彙	割合 %
名 詞	503	60.90	480	59.33	603	58.71
動 詞	171	20.70	179	22.13	206	20.06
形 容 詞	57	6.90	50	6.18	77	7.50
副 詞	66	7.99	64	7.91	83	8.08
接 続 詞	2	0.24	5	0.62	14	1.36
感 動 詞	27	3.27	31	3.83	44	4.28
自立語計	826	100.00	809	100.00	1027	99.99

『南京玉』と久保語彙の品詞別の語彙量は、異なり語数においても割合においても近い数値を示す。大久保語彙は自立語計において『南京玉』と久保語彙よりも200語程度多い。そして、どの品詞においても『南京玉』と久保語彙よりも異なり語数が多い。しかし、割合においては近い数値を示している。3歳児の自立語の使用語彙として、名詞500語から600語、動詞170語から200語、形容詞50語から70語、副詞70語から80語、感動詞30語から40語あたりが目安になると考える。接続詞に関しては習得の過程にあり、個人差が見受けられる。

3 3歳児がよく使う語彙

3.1 『南京玉』に頻出する語彙

『南京玉』に頻出する語彙を取り上げてその傾向を明らかにすることで、3歳児のことに現れた関心の有りように触れる。『南京玉』に見られる自立語の各語の使用率(使用度数÷総延べ語数×1000、単位パーミル%)を計算し、使用率が5.0パーミル以上のものを頻出語とし、その中でも25.0パーミル以上のものを最頻出語とする。この操作によって全部で34語の頻出語が抽出できた。その中で最頻出語は3語であった。それらを使用率の降順に並べて示すと表4のようになる。

『南京玉』の頻出語が大久保語彙でどの程度使用されているかを見るために、大久保語彙に付されている段階を書き加える。これは、Y児から満6歳までに採集した3182語を5段階にわけたものである。使用度数100以上をA、50以上をB、10以上をC、2以上をD、1をEとしている。A段階の27語とB段階の56語は3歳未満の初出語である。使用度数の大きい語は3歳までに習得し終えているという。なお、C段階は303語、D段階は1219語、E段階は1577語である。

大久保語彙のA・B段階にあるが、『南京玉』で使用されていない語は次の通りである。

A段階 八千代(名)、ママ(名)、あの一(感)^(注5)、それで(接)、そう(感)、パパ(名)

B段階 つくる(動)、じゃー(接)、だって(接)、おなじ(形)、あなた(名)、はやく(副)、そんな(連体)

これらのうち、人物呼称の「八千代」、「ママ」、「パパ」は『南京玉』の頻出語である「ふうちゃん」、「おかあちゃん」、「おとうちゃん」に対応する。「あなた」は『南京玉』の「あんた」1例に対応する。感動詞には使用の個人差が想定され、副詞、接続詞、指示語には獲得時期の差も想定される^(注6)。

表4 『南京玉』の頻出語

見出し	度数	使用率%	漢字	品詞	大久保段階
てる	94	30.03		連語	A ^(注7)
ふうちゃん	86	27.48		名	
おかあちゃん	81	25.88	母	名	B
する	62	19.81	為	動サ変	A
くる	52	16.61	来	動カ変	A
これ	34	10.86	此	名	A
ない	33	10.54	無	形	A
ゆく	31	9.90	行	動五段	
あかい	29	9.27	赤	形	C
なる	28	8.95	成	動五段	A
でる	28	8.95	出	動下一	B
この	25	7.99	此	連体	B
おばあちゃん	25	7.99	祖母	名	C
にんぎょう	24	7.67	人形	名	C
いる	24	7.67	居	動上一	A
たくさん	21	6.71	沢山	副	C
おとうちゃん	21	6.71	父	名	C
いう	21	6.71	言	動五段	A
なか	20	6.39	中	名	C
あそぶ	20	6.39	遊	動五段	A
あげる	20	6.39	上	動下一	A
つき	19	6.07	月	名	D
いく	19	6.07	行	動五段	A
また	18	5.75	復	副	B
きれいだ	18	5.75	綺麗	形動	B
きゅうびいちゃん	18	5.75		名	E
ふる	17	5.43	降	動五段	D
つく	17	5.43	付	動五段	C
いい	17	5.43	良	形	A
あめ	17	5.43	雨	名	C
みんな	16	5.11	皆	名	B
たべる	16	5.11	食	動下一	A
きる	16	5.11	着	動上一	C
かう	16	5.11	買	動五段	B

ここで問題となるのは、「つくる」、「おなじ」のように日常よく使う語が『南京玉』で使用されていないことである。『南京玉』は記録の期間が限られているので、「つくる」、「おなじ」がそれよりも早い時期に使用されたか、あるいは記録として残っていない可能性もある。しかし、日常よく使う語であるので『南京玉』における不使用について取り上げる。

「つくる」に関しては『南京玉』の「こさえる」が対応すると考えられる。「こさえる」は「こしらえる」の音変化したもので、『南京玉』に10例見られる。

(1) 花(ハナ)ミタイナオハジキ、並(ナラ)ベテ、オ池(イケ) コサヘタヨ [41]

(2) ショウギノ駒、ナニコサハウ、ノオ舟コサハウ、タクサンコサハウ、[64]

例(2)のように未然形の語尾と助動詞が縮約された形がしばしば見られるが、「オ家コサヘヨウカ」[89]のように縮約されない形もある。これらの「こさえる」を「つくる」に変えても文意の変化はない。『南京玉』では「こさえる」を「言ってきかせる」意味では用いない。「つくりあげる」意味に限定して用いている。なお、「こしらえる」は大久保語彙のD段階にあり、初出は1歳の時である。

「おなじ」に関しては、『南京玉』で用法の対応する語が見いだせない。意味範疇の重なる語に「いっしょ」があるが、『南京玉』の例は意味が重ならない。

(3) 一チヨニ、アソバウカトイッテキマス [122]

『南京玉』に「おなじ」の対義語「ちがう」が1例ある。

(4) ネンネシテ、オキテ、ノマタネンネシテオキテ、ノマタネンネシテオキテ、ノオ正月、ノチガヒマスヨ、アサッテデスヨ。[97]

「ちがう」は大久保語彙のB段階にあり、初出は1歳の時である。3歳児では異同の概念を十分に獲得していないといわれている^(注8)。「おなじ」がゼロで「ちがう」が1例という結果は、幼児の異同の概念の獲得と関わるのではないかと推量する。

3.2 最頻出語

最頻出語は連語の「てる」、名詞の「ぶうちゃん」、「おかあちゃん」である。

「てる」は動作の進行や継続にも、変化の結果にも用いている。「てる」の形が76例が多いが、過去完了の「た」がついた「てた」が14例、打消しの「ない」がついた「てない」が2例、丁寧の「ます」がついた「てます」が2例存する。大久保愛(1967)によると、1歳8か月で「シテル」、2歳2か月で「行ッテタ」、3歳2か月で「言ッテマス」が初出語になっている。また、1歳6か月から3歳までの合計が119例で、「てる」は連用形の下接語として多用されているという。「てる」はそのままアスペクトを表現し、形の上では「て」に「た」、「ない」、「ます」を接続してテンス、打消し、丁寧を表現できる、使いやすい語である。その使いやすさによって3歳児の言語表出に欠かせない語となり、『南京玉』で最頻出語になったと推定する。

「ぶうちゃん」は長女の一人称である。接辞をつけて「おぶうちゃん」の形でよく用いる。おそらく周囲の人々からこのように呼ばれ、それが一人称として定着したのであろう。『南京玉』では昭和4年(1929)10月から翌5年2月まで通して「(お)ぶうちゃん」を用いている。長女は自分の名前を知っている。『南京玉』には2回出てくる。しかし、長女は「ぶさえ」を一人称に用いない。

(5) オバアチャン、オハガキ、ノミヤモト、ブサエ サマ、テ書(カ)イテルヨ。[31]

(6) オ母チャンノ本、ノチョットミセテオクレネ、ノコノ本、絵ガ少ナイネノジガタクサン、ノミヤモト、ブサエサマッテ書イテアルヨ。[118]

昭和5年1月になると、一人称に「わたし」が現れる。

(7) 私ガタバタ、トッチャッタ、ノタカラモノ、逃ゲテッタ。[114]

(8) モシモシ、ワタシハオバアチャンデス、ノイマナニシテキマスカ、ノデンワ カカリマスヨ、ノサヨウナラ、チリンチリン。[151]

これらの「わたし」は耳から取り入れたことばを口真似しただけのものかもしれない、また、自分自身を示していないかもしれない。大久保愛（1967）のY児にかかわる報告によると、「わたし」が多くなるのは4歳からで、親との会話ではY児の名前を使い、友だちとのごっこ遊びでは「わたし」を使うという使い分けをしたという。『南京玉』の場合、親との会話や一人のおしゃべりが記録されている。この後、自分自身を示す語としての「わたし」の使用が予想される。3歳児は一人称として周囲の人々の呼びかけに基づく自身の名前を用いるといえよう。

「おかあちゃん」は長女が母の金子みすゞを呼んだり、表したりするときに用いる。この語も昭和4年（1929）10月から翌5年2月まで通して現れる。長女は母の名前を「てるこ」と知っている。母を表すのに「おかあちゃん」のほか「てるこ」を3度使っている。

(9) オトウチャン、宮本（ミヤモモ、マ）ケイキナイ、テルコ、ノオカアチャン、テルコナイ、ケイキ。[18]

例(9)で父の名前の「ケイキ」と母の名前の「テルコ」を一度は正しく言った後でそれを否定し、わざと反対に言うという手の込んだことをする。このように、わざと反対のことを言ったり行ったりという行為は1歳半から3歳くらいまでの幼児に見られる普通の現象である。発達の途上に見られる正常の現象で、自分は自分、他人は他人という自我の発達の現れである^(注9)。

(10) オ手々洗ウタラ、ノオフキナサイ、照子サン。[89]

「オ手々」という幼児語を用いながら、どこかで習い覚えた「照子サン」という言い方で呼びかけている。自分を包み込む「おかあちゃん」から離れて対象化しようとする。これも自我の発達の現れである。

3.3 頻出語

頻出語は「する」から「みんな」までの31語である。頻出語の第一の特徴は動詞が多いことである。全部で15語存し、「する」、「くる」、「なる」など基礎語が並ぶ。「ゆく」と「いく」は同義であるが、別語として計量した。表3を見ると、異なり語数において自立語に占める動詞の割合は20パーセント強である。この割合に比例すると仮定したら、頻出語の動詞は7語程度になるはずである。そこで、先行の調査結果を見ることにする。大久保語彙ではA・B段階の83語のうち、動詞は33語である。また、国立国語研究所（1989）による児童の作文語彙の調査では、小学校1年初出語の上位30語のうち、動詞は13語である^(注10)。これらの結果と『南京玉』の特徴は、頻出語に動詞が40パーセント前後存在するという点で一致する。これは、幼児期に同じ動詞を繰り返し使用していることを示す。

『南京玉』、大久保語彙、児童の作文語彙の三者で共通に上位に位置するのは「する」、「くる」、「なる」、「いる」、「いう」、「いく」の6語である。『南京玉』、大久保語彙で共通に上位に位置する「でる」、「あそぶ」、「あげる」、「たべる」、「かう」は話し言葉での使用が多いようである。

ところで、「ゆく」は『南京玉』で多用されているのに、大久保語彙に見られない。「ゆく」と「いく」には接続する付属語に相違がある。「ゆく」の場合、未然形に助動詞「う」の接続したものが10例、連用形に「ます」の接続したものが9例存する。「いく」の場合、助動詞「う」や「ます」の接続したものが1例ずつ見られるが、連用形に助動詞「た」の接続した「イッタ」が14例存する。接

統する付属語との塊として「ユキマス」「ユカウ」「イッタ」と捉えているようである。

頻出語の第二の特徴は名詞「おばあちゃん」、「おとうちゃん」、「にんぎょう」、「きゅうぴいちゃん」のように、身近な人物や玩具の呼び方があがっていることである。「おばあちゃん」は金子みすゞの実母を指し、長女は祖母と同居ではないが日常的に交流している。「おとうちゃん」の多用からは父親が長女に愛情を注いでいたことが推察される^(註11)。「にんぎょう」は接辞「お」や「ちゃん」、「さん」のついた形でも使われる。別語に「おどりにんぎょう」が2例、「だんすにんぎょう」が3例ある。「きゅうぴいちゃん」はキューピーのことで、日本では大正から昭和にかけて流行し、大量に生産された。流行の収まった昭和中期の大久保語彙で「きゅうぴいちゃん」はD段階にある。これらの玩具は人のように扱われる。

(11) 紙ノオ人形、ノコッチムイテ、オヒバチオアタリ、ノオ手(テ)、ツメタイカラ。[58]

(12) オセンベ、カウタノ、ブウチャンナイ、ノキューピーチャン、カウタノ。[7]

幼児は自己を中心とした捉え方や、自己を拡張して身近な物に自己と同じ生命を与える捉え方をする。最頻出語の「ぶうちゃん」は一人称、「おかあちゃん」は最も身近な人の呼び方であった。表4には指示語として近称の名詞「これ」、近称の連体詞「この」が存在する。最頻出語の「ぶうちゃん」、「おかあちゃん」と同様に、幼児の自己を中心とした捉え方を反映する語群が頻出語としてあがっている。

頻出語の第三の特徴は気象に関わる語として「あめ」、「つき」があがっていることである。「あめ」は動詞「ふる」と共起している。「あめ」17例のうち、15例は「ふる」と、1例が「ふりだす」と、残り1例が「あがる」とともに使われている。動詞「ふる」の側から見ると、全17例のうち16例が「あめ」と、1例が「ゆき」とともに使われている。

(13) アメフットラン、ヲトトヒ、フツタ。[51]

「あめ」に対応する語は「てんき」である。全8例、晴れているさまを表し、そのうちの6例は形容詞「いい」と共起している。

(14) ケフ、イイオ天気、ノ雨フツテナイネ、[160]

「つき」は空に浮かぶ月そのものを指している場合もあるが、月のように丸い形や欠けた形を表すのに「つき」という語を使う場合もある。その用法は『南京玉』で昭和4年(1929)10月から翌5年2月まで通して見られる。

(15) オ月サマ、コンヤ、ボンヤリシテル、ノオホシサマ、ヒトツモデトラン、ノ夕焼(ユウヤケ)モ、モウナイネ。[41]

(16) オ釜ノフタ、コハレタヨ、ノオブウチャンガコハレタヨ、ノ半分ノオ月サマ ナッタ。
ノクツケテチャウダイ、ノリデ、[121]

「つき」はしばしば擬人化され、昭和4年(1929)11月まで「いる」ものとして扱われている。

(17) オツキサマ、彼処(アッコ)ニオタ、イマオナクナッタ、[30]

その後は「でる」ものとして扱われている。

(18) オカアチャン、オ月サマヨ、ノキレイナミカヅキサマガデテキマスヨ、[70]

家庭で養育されている幼児にとって、雨が降っているか否かという戸外の状況は、自己の活動の場に関わる大きな関心事であったろう。そして、暮れてからの戸外で目を引く対象が月であった。大久保語彙で「つき」、「ふる」がD段階、「あめ」がC段階に位置するのと比べると、『南京玉』での使用は際立っている。3歳児は見えるものを話題にする。雨や月は目で簡単に認知でき、自己がいる場の外の様子を知るための目印になる。外界の様子を目視で認知できる語群が頻出語として

あがっている。

なお、『南京玉』に「たいよう（太陽）」、「てんとう（天道）」の使用例はなく、「ひ（日）」が1例存する。

(19) 日ガ暮レマシタ。[125]

太陽は例(19)のように日没や、例(15)のように夕焼という現象で捉えられている。

最後に色彩を表す語について触れる。表4には「あかい」があがっている。『南京玉』には「あかい」の他に色彩を表す語として、形容詞「しろい」10例、「あおい」9例、「きいろい」6例、「くろい」6例、形容動詞「まっくろけだ」5例、「まっしろだ」2例、名詞「ももいろ」1例が存する。乳児がはじめに認識できるようになる色は赤、青、黄の三原色で、幼児期は性差に関係なく、目立つ色や見やすい色を好む傾向がある。『南京玉』も赤、青、黄の三原色に白、黒を加えた5色が中心で幼児期の色彩認識をよく示している。何を対象に色彩を捉えたのか、判別できたものをあげると次のようである。複数の場合、用例数を示す。

あかい：傘、もみじ、ベベ（着物の意）3、糸2、衿、おはじき、南京玉、金魚、ハトポッポの玩具、自動車、字、姉様、電気、鉢巻、りんご、だるま、マント（だるまの着衣に見立てる）3、口2、ほっぺた3、不明2

しろい：傘、糸巻、雲、大根、箱の内側、字、鉢巻、おむすび（毬を表す）、不明2

あおい：帯、ベベ2、糸巻、おはじき、雲、寿司、りんご、空

きいろい：泥の饅頭、おはじき、船、顔、みかん、桃太郎（毬を表す）^(注12)

くろい：糸巻、ベベ、南京玉、人、豆、月の見えない半分

まっくろけだ：からす、（からすの）手足、糸巻、じゃがいも、炭

まっしろだ：字（印刷のカスレ）2

ももいろ：箱

糸巻は糸の色を区別していると推察される。

(20) イトマキ、並（ナラ）ンダ、並ンダ、／青（アオ）イノト、黒（クロ）イノト、白（チロ）イノト／針箱ナカ、ナランダ、ナランダ。[22]

同じ色彩で表しても実物の色にはかなり相違がある。たとえば「きいろい」にあがった「泥の饅頭」は土色であろうし、「みかん」は橙色であろう。「みかん」については「ほっぺた」を表すのに次のようにも表現している。

(21) コッチノホッペタ、リンゴ赤イ、／コッチノホッペタ、オミカン赤イ。[163]

表4にある形容動詞「きれいだ」は色彩を表す語としばしば共起する。

(22) オハジキ、コチン、コチン、ナカナカアタラン。／赤（アカ）イノト、黄（キイ）ロイノト、青（アオ）イノト、キレイネエ。[35]

「きれいだ」は感性を表す語であるが、『南京玉』では明るい色・鮮やかな色やそのような色の物を視覚で捉えて用いる場合が多い。

ところで、『南京玉』の色彩を表す語の中で、「あかい」は使用度数において他の語と差をつけて頻出語にあがった。幼児の色彩嗜好の研究^(注13)によると、3歳児は男女ともに赤を好み、女兒はその後赤や橙など暖色を好む傾向があるという。「あかい」の多用は3歳児の色彩嗜好を反映しているといえよう。

4 おわりに

『南京玉』に使用されている語彙を計量することで3歳児の語彙量の目安を測定し、頻出語に着目して3歳児の語彙の特徴を発達と関わらせて分析した。その結果は次の通りである。

- (a) 『南京玉』には、異なり語数において自立語 835 語、助動詞 14 語、助詞 33 語が存する。延べ語数において自立語 3130 語、助動詞 551 語、助詞 1341 語が存する。
- (b) 3歳児の使用語彙は、採集時間を限定した場合 900 語から 1000 語くらいが目安になるが、実際には 1500 語から 1700 語くらいになると考えられる。『南京玉』の異なり語数の調査結果は時間を限定した場合の従来の調査を補強するものとなる。
- (c) 『南京玉』と久保語彙・大久保語彙の品詞別異なり語数の比較によって、3歳児の自立語の使用語彙として、名詞 500 語から 600 語、動詞 170 語から 200 語、形容詞 50 語から 70 語、副詞 70 語から 80 語、感動詞 30 語から 40 語あたりが目安になることが明らかになった。接続詞に関しては習得の過程にあり、個人差が見受けられる。
- (d) 『南京玉』に見られる自立語の各語の使用率を計算し、使用率が 5.0 パーセント以上のものを頻出語とし、その中でも 25.0 パーセント以上のものを最頻出語とした。全部で 34 語の頻出語（うち、3 語の最頻出語）が抽出できた。
- (e) 「つくる」、「おなじ」は大久保語彙で A、B の段階にあり、日常よく用いる語であるが、『南京玉』で不使用である。『南京玉』では「こさえる」を「つくりあげる」意味で使用しており、「こさえる」の習得により意味をカバーできている。「おなじ」が不使用で「ちがう」が 1 例という結果は、3歳児では異同の概念を十分に獲得していないという幼児の発達と関わると推量する。
- (f) 最頻出語は「てる」、「ぶうちゃん」、「おかあちゃん」である。「てる」は動作の進行や継続にも、変化の結果にも用いられ、その使いやすさによって3歳児の言語表出に欠かせない語となったと推察する。「ぶうちゃん」は3歳の時点では一人称として周囲の人々の呼びかけに基づく自身の名前を用いることを示している。「おかあちゃん」は幼児にもっとも親しい人物で多用されるが、母の名前を利用した箇所に自我の発達がうかがわれる。
- (g) 頻出語の第一の特徴は動詞が多いことである。大久保語彙、児童の作文語彙にも同様の傾向が見られ、頻出語に動詞が 40 パーセント前後存在するという点で一致する。幼児期に同じ動詞を繰り返し使用していることを示す。
- (h) 頻出語の第二の特徴は名詞「おばあちゃん」、「きゅうぴいちゃん」のように、身近な人物や玩具の呼び方があがっていることである。幼児の自己を中心とした捉え方を反映する。
- (i) 頻出語の第三の特徴は気象に関わる語として「あめ」、「つき」があがっていることである。これらは目で簡単に認知でき、自己がいる場の外の様子を知るための目印になる。3歳児は見えるものを話題にするという特徴を反映する。
- (j) 『南京玉』に見られる色彩語は、幼児期の目立つ色や見やすい色を好むという色彩認識をよく示している。「あかい」の多用は3歳児の色彩嗜好を反映している。

幼児の置かれている環境には相違があり、発達には個人差があるが、幼児がことばを獲得していくためには声掛け、応対、読み聞かせなど、いろいろな形でことばを届けることが何よりも重要であることが認識された。今後、文法の獲得、発音の発達という点での研究を進める予定である。

〈注 記〉

- 注 1 助詞の異なり語数は、「(お金が) ツツラカラナイ_レ、金庫 (キンコ) カラデタ_レ」[39]、「トランプ_レワウサマト」[75] のように、文中における文法的機能が異なる場合も同じ語として計量する。助動詞の異なり語数は、「オトウチャンニ叱 (シカ_{ママ}) レルカラ」[57] (受身)、「(服が) キラ_レンダツタ」[74] (可能) のように文中における意味が異なる場合も同じ語として計量する。「アゲマシヨ」[72]、「ヌクイダロ」[87] は助動詞「う」を計量しない。
- 注 2 久保良英 (1922) の調査における 3 歳児の品詞別の異なり語数は以下のようである。名詞 461、代名詞 19、動詞 179、形容詞 50、副詞 64、接続詞 5、感動詞 31、助動詞 33、助詞 44、合計 886。
- 注 3 大久保愛 (1967) の初出語調査における 3 歳児の品詞別の累積異なり語数は以下のようである。付属語は含まない。名詞 521、固有名詞 46、数詞 19、代名詞 17、動詞 206、形容詞 50、形容動詞 19、副詞 51、連体詞 8、接続詞 14、感動詞 44、音まね語 44、連語その他 2、合計 1029。
- 注 4 久保良英 (1922) の助動詞には「ラス (鳴らす)」のような語の一部や、「マセン (しません)」、「マセンカ (食べませんか)」のように複数の助動詞や助詞の連続したものなども含む。また、助詞には「ダ (これだ)」、「ヤウ (見たやうだ)」などを含む。
- 注 5 大久保愛 (1967) では品詞が「間投」とある。
- 注 6 副詞「はやく」については『南京玉』に形容詞「はやい」の終止形が「ゴハン、マダ早 (ハヤ) イ」[23] のように 2 例見られる。
- 注 7 大久保愛 (1967) では連用形に接続する融合形として「てる」を計量し、使用度数を 119 としているので、その数値によって段階を示した。
- 注 8 外山滋比古 (1993) は、3 歳児は心理的な視力が育っておらず、同じものと違うものとの区別がつかない旨を述べている。
- 注 9 馬場一雄 (1997) は「反対癖」(ネガティビズム)ということばを用いている。
- 注 10 大久保語彙の段階 A・B の動詞 33 語のうち、『南京玉』で頻出語にあがるのは「する、くる、なる、でる、いる、いう、あそぶ、あげる、いく、たべる、かう」の 11 語、頻出語ではないが使用されているのは、「やる、みる、ある、もつ、かえる、はいる、知る、わかる、取る、もらう、泣く、ちがう、書く、くれる、いれる、乗る、寝る、読む、なさる、聞く、くださる」の 21 語、『南京玉』で使用されていないのは、「つくる」1 語である。児童作文の動詞 13 語のうち、『南京玉』で頻出語にあがるのは、「する、くる、なる、いる、いう、いく」の 6 語、頻出語ではないが使用されているのは、「みる、ある、かえる、しまう、やる、くれる」の 6 語、『南京玉』で使用されていないのは、「おもう」1 語である。
- 注 11 『南京玉』の解説『『南京玉』発刊に寄せて』(矢崎節夫)に「夫との別れ話が進んでいる時」であったが、長女に対する「夫の存在をきちんと見つめていた、みすゞのまなざしの深さに」心打たれるとある。
- 注 12 「コノ人、キイロイ桃太郎モツテル、ノコノ人、チロイオムスピモツテル。」[119] に出てくる。みすゞによる「どっちも毬もってゐる絵を」という注記がある。黄みがかった丸い桃のような毬を桃太郎と呼んだのであろう。
- 注 13 高橋春子・和田恵美子 (1972)、森俊夫・齋藤益美・梶浦恭子 (2011) などによる。

〈参考文献〉

- 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』東京堂出版
- 金子みすゞ (2003) 『南京玉』JULA 出版局
- 久保良英 (1922) 「幼児の言語の発達」『児童研究所紀要』5 号、『児童問題調査資料集成』10 巻 (大空社 1992 年) 収録
- 国立国語研究所 (1989) 国立国語研究所報告 98 巻『児童の作文使用語彙』東京書籍
- 高橋巖 (1977) 『幼児のことば』上 教育出版センター
- 高橋春子・和田恵美子 (1972) 「幼児の色彩嗜好に関する研究」『家政学雑誌』23 巻 3 号
- 外山滋比古 (1993) 『子育ては言葉の教育から 幼児教育で忘れてはならない 39 章』PHP 文庫
- 馬場一雄 (1997) 『子育ての医学』東京医学社
- 前田富祺・前田紀代子 (1983) 『幼児の語彙発達の研究』武蔵野書院
- 森俊夫・齋藤益美・梶浦恭子 (2011) 「幼児の嗜好する色彩特徴」『岐阜女子大学紀要』40 号